九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

# 御徳炭鉱への千早正次郎のかかわりについて

千早, 陽生
千早正次郎 : 係累

https://doi.org/10.15017/7172160

出版情報：エネルギー史研究 : 石炭を中心として. 39, pp.83-89, 2024-03-25. 九州大学附属図書館付設記録資料館産業経済資料部門
バージョン：
権利関係：

# 【研究ノート】御徳炭鉱への千早正次郎のかかわりについて

千　早　陽　生

## 一　はじめに

二〇一五年に『エネルギー史研究』に掲載された「御徳炭鉱にみる海軍予備炭田の実態」（以下「西尾・宮地論文」と表記）の宮地氏執筆箇所には、「一八九九（明治三二）年七月一三日には海軍省軍務局長の諸岡頼之海軍少将名により、千早正次郎に対して御徳炭鉱の採炭を請け負わせる命令書が出された」をはじめ、いくつかのところに千早正次郎の名前が出てくる[1]。

この千早正次郎について、「西尾・宮地論文」のなかでは「千早正次郎は、山口県豊浦郡長府出身の旧長府藩士であった。」と記述され、また、この文章の注で「この千早正次郎と同時代に筑豊地方で活躍した人物として、岐阜県出身で海軍主計学校を卒業後に海軍大主計などを経て九州田川炭坑会社の総支配人や代議士を歴任した同姓同名の千早正次郎（一八五六－一九三八）がいるが、本稿で取り上げている千早正次郎とは全くの別人である。」とされている[2]。

この二点の記述が事実ではないのではないかと考えられるので、以下、検討してみたいと思う。

千早正次郎は、原稿用紙三百余枚に及ぶ「回顧録」を残した（一部欠損）[3]。

二〇二〇年に、千早正次郎の曾孫にあたり、現在は中津川市苗木遠山史料館資料調査員の千早保之氏がこの回顧録を現代語訳し、『回顧録　明治の実業家　千早正次郎の波瀾重畳』（以下『重畳』と表記）として出版しているため、この現代語訳の『重畳』をベースとして検討することとする。『重畳』から資料引用を行う際には注記を付したが、それ以外でも特段の注記がない箇所は『重畳』によることとする。

「回顧録」には日付がほとんど明記されておらず、『重畳』編纂時に千早保之氏も苦労したようで、時期については正次郎の記述内容などから推察したものもみられる。

なお、「西尾・宮地論文」は、『重畳』を読みながら千早正次郎に関連することについてインターネットで検索していたところヒットし、拝読

させていただいたものである。

## 二　前史

千早正次郎は、河内正右衛門を父として、一八五六（安政三）年に江戸で生まれた。

当時、苗木藩江戸家老だった正次郎の祖父河内三郎右衛門正方は、ある事件によって一八四〇（天保一一）年に獄死した。その後、苗木藩江戸屋敷での債務破綻が明らかとなり多くの処罰者が出て（「河内の一件」）、河内家は家名断絶となり江戸屋敷を追われており、正次郎が生まれたとき河内正右衛門は二三歳で浪人の身であった。

この時期に、妻があり子ができた河内正右衛門がどのように生活の糧を得ていたのかは、よくわからないようである。なお、河内正右衛門は獄死した河内三郎右衛門正方の一七歳年下の末弟であったが、河内三郎右衛門正方の養子になっていた。

一八六〇（安政七）年、苗木藩主の遠山友禄が奏者番となり、翌一八六一（文久元）年に若年寄となったとき[4]、正方の仕事ぶりを評価していた友禄により、河内正右衛門は苗木藩に登用されることとなった。このとき河内姓を千早姓にあらため、正理と名乗り、苗木藩江戸屋敷詰めとなったのである。

一八六八（慶応四）年、正理は、すでに苗木に帰っていた藩主遠山友禄の夫人美子を江戸から苗木に連れ帰り、正次郎も江戸から苗木に移り住むこととなった。正理は、苗木藩庁ではなく一八六八（慶応四）年に創設された苗木藩校日新館で[5]、筆学として勤め[6]、正次郎も職員として名前を連ねている[7]。

一八七〇（明治三）年、正次郎は苗木藩銃士となるが、一八七一（明治四）年の廃藩置県により苗木藩が苗木県となったことで職を失い、一八七二（明治五）年に上京、東京府立育英義塾で学ぶこととなる。

廃藩置県のとき、苗木県では次のように布告されている。

「銃手一同へ

一、今般解兵願済ニ付勤向差許候事　辛未七月　苗木県庁[8]」。

## 三　海軍時代

上京した正次郎は、一八七四（明治七）年に司法省法学校の試験を受けるも不合格となり、同年暮れに海軍主計学校（当時は「海軍会計学舎」、後に「海軍主計学舎」と変遷）の入学試験を受け、合格した。

一八七五（明治八）年一月に正次郎は主計学校に入学し、一八七八（明治一一）年一二月に主計学校を卒業している。その後、海軍に入り、浅間艦乗組を命じられたが悪性チフスにより海軍病院に入院してしまった。快復後は主計補として医務局（長谷川貞雄局長、後に貴族院議員）に勤務することとなり、医務局の改革を担った。

一八八〇（明治一三）年に新造の磐城艦に一年間乗り組み、その後海軍経理局を経て一八八二（明治一五）年に浅間艦乗り組みとなった。このとき浅間艦副長であった山本権兵衛（当時は大尉、一八九八（明治三一）年に海軍大臣、一九〇七（明治四〇）年に伯爵、一九一三（大正二）年に内閣総理大臣）の知遇を得たようである。

正次郎は、山本権兵衛の後押しもあって、一八八三（明治一六）年に

は海軍主計本部第一科長心得となり、一八八五（明治一八）年四月には天城艦主計官に転任し、同年一二月に官制改革があると、天城艦主計官から海軍経理局供給課主事となっている。

一八八六（明治一九）年、正次郎は初代海軍大臣の西郷従道の海外視察に随行することが決まったが、同年四月、主計官懇親会の席上、同僚の飯村知・加唐為重とともに林清康会計局長（『重畳』では経理局となっている）に直接意見し、会場は局長擁護派との間で乱闘騒ぎとなってしまった。この事件により正次郎、飯村、加唐は軍法会議にかけられ、正次郎は軽禁錮七ヶ月に処せられたのである。

この獄中において、「加唐為重を中心とし、飯村知、千早正次郎の三名は生命保険事業を研究し、帝国生命の創立を盟約」した[9]。七ヶ月の刑期満了後、正次郎は海軍への復職を拒否し、海軍を去っている。

## 四　田川炭鉱

生命保険会社創立をめぐっては、正次郎と飯村知は、「民間に知己を得ると同時に創立費用調達の便を得て間接に会社設立の事業を賛ける」ために民間の会社に入ることとし[10]、一八八七（明治二〇）年、正次郎は長谷川貞雄に呼ばれ、藤田伝三郎（藤田財閥創始者）や大倉喜八郎（大倉財閥創始者）が設立した「内外用達会社」支配人に就くことになった。ちなみに内外用達会社の理事長は、陸軍から入った福島良介であった。

こうして、帝国生命会社が一八八八（明治二一）年二月に加唐為重を理事長として創立されると、正次郎は直接には参加することはなかった。

正次郎の海軍時代の同僚たちはすでに重要な位置にあったことで、内外用達会社の海軍における「被服糧食及び海外輸入に係る鉄材機械等は凡て会社の手に落ち[11]」、会社は利益をあげることができた。しかし正次郎としては、会社が利益をあげることよりも海軍に利することのほうが大事だったようで、また大倉喜八郎との意見も食い違ったことから、まもなく退社の意を固め、眼病の治療に専念することとなったのである。

それからしばらくして、一八八九（明治二二）年一二月二〇日に福島良介から「田川の海軍予田炭が解放されて海軍需用の石炭を得て、海軍需用の石炭を納付し、その代償として一日千トンの民間需要炭の採掘をなす」会社に誘われることとなった[12]。ただし、その計画は一時頓挫してしまう。頓挫の背後には大隈重信と井上馨の対立があったようである[13]。

こうして正次郎は直ちには参加しなかったのであるが、翌年五月に福島良介から再度の要請があるとこれに応じ、一八九〇（明治二三）年六月には東京を引き払って、家族は苗木に移し、福島良介を社長とする田川採炭会社に赴くこととなったのである。田川採炭会社の相談役は、渋沢栄一であった[14]。

その後約一〇年のあいだ、正次郎は田川炭鉱の採炭事業にかかわるが、事業をめぐっては多くの課題があり、株主と衝突したり炭鉱の火災もあって苦労したようで、その経過は「重畳」に綴られている。

また、石炭の運送では「豊洲鐵道会社」（一八九五（明治二八）年開業、一九〇一（明治三四）年九州鉄道に合併、一九〇七（明治四〇）年国有化、日豊本線）を設立したが、鉄道省は鉄道が他業を経営することを認めなかった。このため、田川採炭会社を解散し、福島良介が経営する田川炭鉱となったが、実態は豊州鐵道内の鉱業部だったようであり、豊州鐵道株式會社社長であった松本重太郎が千早正次郎を「田川炭鉱採

炭部長ヲ命ス」とした明治二八年七月一日付の辞令が出されている。[15]

正次郎は、一八九三（明治二六）年には苗木の家族を田川に呼び寄せていた。

一八九八（明治三一）年、帝国議会第六回衆議院議員総選挙が行われているが、地方の有志や会社の部下達が正次郎を候補者とし、当選してしまったようである。ところが、選挙違反として検挙された者が多く出たために、正次郎は当選を辞退している。第六回衆議院議員総選挙のときのいきさつについては、『重畳』では反対派の陰謀によるもののように書かれている。しかしながら、はたして何があったのかは当時の記録を精査してみなければわからないと考えている。

この事件を記した『重畳』の中で、正次郎は「長府の本邸に帰った」としており、[16]このことから家族を田川に呼び寄せた一八九三（明治二六）年以降総選挙の一八九八（明治三一）年までの間のいずれの時期に、長府に居を構えたものと思われる。また、「西尾・宮地論文」では、この長府在住の士族ということで、苗木藩出身の正次郎とは別人であると記述したと推察される。

その後長府で別の場所に転居しているが、移転後の場所は、現在は下関市立歴史博物館となっているという。筑豊の田川炭鉱で仕事をしながら、なぜ山口県の長府に居を構えたのか、『重畳』ではその理由はさだかではない。

これまでの会社の重役たちとの衝突に加え、この選挙事件で正次郎は退職を決め、「採炭部長　千早正次郎　依願解職　明治三十一年九月廿一日　豊州鐵道株式會社」の辞令が出されている。[17]ちなみに田川炭鉱は、一九〇〇（明治三三）年に三井が買い取っている。[18]

## 五　御徳炭鉱

田川炭鉱を辞した正次郎は東京で山本権兵衛伯と会い、海軍の予備炭田御徳炭鉱の経営について打診を受けることとなる。正次郎は、予備炭田の隣坑を御徳炭鉱として経営していた堀三太郎と会い、予備炭田の模様を尋ねることとした。

すると堀三太郎から「予備炭田の左側に赤地炭鉱があり、右側に堀の御徳鉱がある。その裏面に赤池炭鉱がある。これら三炭鉱の炭層は皆予備炭田の上層に位する。だからこの三炭鉱からの進掘は免れない。赤池を除くの他は三、四年にして採掘を終わりこれらが廃坑となる時はこの坑内の水は悉く海軍炭鉱に流注する。だから周囲の炭鉱が採掘中に事業を開始しないと予備炭田は非常な排水装置を為さないと採掘する事は難しい。然るに僅か三、四十万トンを含有する炭田に対して多額を要するのみならず、生産費も嵩み石炭は採掘し得るも収支償わず大損失を招く。数年来、各方面の人にこの解放を出願するのも海軍省では如何なる理由があろうとも頑として解決しない。だから自分（堀）は解放を出願する事なきもその地表は悉く私の所有なれば、何人か解放の許可を得るも私を除外して事業を起こす事は出来ない」との説明を受けた。[19]

正次郎が堀三太郎から聞いたことを山本伯に報告すると、山本伯は速やかな採掘が得策であるとして、正次郎に「書面を海軍大臣に宛てて提出すべきだ。その時は私は関係当局に、君と協議すべきだと命じる」として採掘を勧めたという。[20]一九〇〇（明治三三）年一月に御徳炭鉱の経営が始まるので、山本伯や堀三太郎とのやりとりは、豊州鐵道を退職した一八九八（明治三一）年後半から一八九九（明治三二）年のころの時

期であったと思われる。

予備炭田の解放を求める多くの運動があるなかで、なぜ正次郎と堀三太郎が御徳炭鉱を経営することになったのかは、『重畳』からは、正次郎が海軍に知己が多かったこと、田川炭鉱経営の経験があったことを山本権兵衛が評価し、その力があったように受け止めることができる。

「西尾・宮地論文」では、「一八九九（明治三二）年六月六日付で明治三二年勅令二二九号が出された。松方正義大蔵大臣と山本権兵衛海軍大臣が輔弼の署名をし、「海軍炭礦採掘ノ請負及採掘ヨリ生スル粗悪炭並ニ粉炭ノ払下ハ競争ニ付セス、随意契約ニ依ルコトヲ得」という内容のものであった」ことや[21]、「先述のように海軍省は、あくまでも堀三太郎を保証人としつつ、直接の請負契約者は千早正次郎としていた」ことが指摘されている[22]。しかしながらその背後で、海軍時代からの正次郎と山本権兵衛との人間関係がどのように作用したのかという点が重要である。これは、山本権兵衛や海軍に何か記録が残されていればなかなか興味深いことが分かるのではないかと思われる。

また、正次郎が堀三太郎に会ったときに堀三太郎が予備炭田の「地表は悉く私の所有なれば」と言った旨記されたことについては、当時の所有権がどうなっていたのかを調べてみないとわからないが、これも正次郎と「最も海軍予備炭田との関わりが薄かった堀三太郎」が[23]、海軍から選ばれて採炭するに至った理由のひとつではないかと考えている。

ただ、正次郎と堀三太郎の関係については、『重畳』では「私は一面の識があるので堀を東京に招き具に海軍予備炭田の模様を聞く」とあるだけで[24]、どのような面識があったのかはわからない。おそらく、正次郎の田川炭鉱時代に何かしらの接触があったのであろうと推察される。これも、堀三太郎に何らかの記録があれば、興味深いであろう。

正次郎は約五年間にわたって御徳炭鉱の仕事をしたが、一九〇五（明治三八）年に水害の被害が甚大となり、正次郎自身の病気もあって、事業を堀三太郎に譲ることとなった。これにより、「西尾・宮地論文」に書かれているように「大正元（一九一二）年九月二一日付けで御徳炭鉱は堀三太郎へと払い下げられる」ことに至ったのであろう[25]。

正次郎はしばらく長府で療養を続けるが、一九〇八（明治四一）年の第一〇回衆議院議員選挙に岐阜市選挙区から選出されたときに長府の邸宅を売り払っている。こうして、千早正次郎の九州時代は終わったのであった。

## 六　おわりに

以上により、次のようにまとめることができる。

千早正次郎は長府に住んだことはあるが、その時期は一八九〇年代から一九〇八年にかけてであり、すでに明治の世となってからのことである。長府に住んでいた士族ではあったが、長府藩とは何の関係もなく長府藩士ではない。

千早正次郎は、「岐阜県出身で海軍主計学校を卒業後に海軍大主計などを経て九州田川炭坑会社の総支配人や代議士を歴任した同姓同名の千早正次郎（一八五六－一九三八）」その人であった。なお、千早正次郎は苗木藩士であった者の子であり江戸から苗木に移り住み藩の銃士となっているが、すぐに廃藩置県で苗木藩は苗木県となり藩の職を失っているので「藩士」とも言えないであろう。

苗木と九州の炭鉱とのかかわりでは、二〇一四（平成二六）年に放映されたＮＨＫの朝の連続テレビ小説「花子とアン」にかかわるエピソードがある。[26]「花子とアン」に出てくる葉山蓮子は、大正時代から昭和にかけての歌人柳原白蓮（燁子）をモデルにしているが、白蓮は九州の炭鉱王伊藤伝右衛門の妻であった。白蓮が伊藤伝右衛門の妻となったのは一九一〇（明治四三）年なので、正次郎はすでに九州を去っていることから、白蓮と会うことはなかったと思われる。ただ、伊藤伝右衛門との面識はあったかもしれない。この柳原白蓮は、各地での講演活動のなかで一九五三（昭和二八）年五月一六日に苗木を訪れており、同年暮れに苗木城に歌碑が建てられた。[27]

## 注

（1）西尾典子・宮地英敏（二〇一五）三六頁。
（2）西尾典子・宮地英敏（二〇一五）三六頁。
（3）千早保之（二〇二〇）一二一頁。
（4）中津川市編（一九八八）一七二九頁。
（5）中津川市編（一九八八）一六九〇頁。
（6）東山道彦（一九八一）二一三頁。
（7）東山道彦（一九八一）二二二頁。
（8）東山道彦（一九八一）二九八頁。
（9）渋沢社史データベース「朝日生命保険（相）『朝日生命八十年史：1888-1968』（1968.03）」年表
https://shashi.shibusawa.or.jp/details_nenpyo.php?sid=10300
（10）千早保之（二〇二〇）二五頁。
（11）千早保之（二〇二〇）二六頁。
（12）千早保之（二〇二〇）二八頁。
（13）井上馨が大隈重信を抑えて会社が成立したことについては、大隈重信や井上馨側の資料を確認してみたいところである。
（14）渋沢栄一記念財団　渋沢栄一関連会社名・団体名変遷図　田川採炭（株）
https://eiichi.shibusawa.or.jp/namechangecharts/names/view/1104
（15）千早保之（二〇二〇）四一頁。
（16）千早保之（二〇二〇）五六頁。
（17）千早保之（二〇二〇）五八頁。
（18）田川市編（二〇一〇）「炭都田川の隆盛」
https://www.joho.tagawa.fukuoka.jp/kiji00351/index.html
（19）千早保之（二〇二〇）六〇頁。
（20）千早保之（二〇二〇）六一頁。
（21）西尾典子・宮地英敏（二〇一五）三五頁。
（22）西尾典子・宮地英敏（二〇一五）三六頁。
（23）西尾典子・宮地英敏（二〇一五）三六頁。
（24）千早保之（二〇二〇）六〇頁。
（25）西尾典子・宮地英敏（二〇一五）三六頁。
（26）ＮＨＫ　連続テレビ小説「花子とアン」
https://www6.nhk.or.jp/drama/pastprog/detail.html?i=hanako
（27）中津川市　《苗木城跡を歩く23》柳原白蓮の歌碑（二〇二三）
https://www.city.nakatsugawa.lg.jp/museum/t/archives/nagiyoatowoaruku/22719.html
「城あとに　やかたも人も　いまなくて　かたるは何ぞ　山鳥の声」（白蓮）

## 参考文献


千早保之（二〇二〇）『回顧録　明治の実業家　千早正次郎の波瀾重畳』自費出版

中津川市編『中津川市史　中巻二』中津川市

西尾典子・宮地英敏（二〇一五）「御徳炭鉱にみる海軍予備炭田の実態」『地球社会統合科学』第二二巻第二号

東山道彦（一九八一）『苗木藩終末記』三野新聞社